

「おふでさき」に、

いまなるの月日のをもう事なるわ  
くちわにんけん心月日や 12-67  
しかときけくち八月日がみなかりて  
心ハ月日みなかしている 12-68

とありますように、教祖になられた中山みき様は、お姿は世の常の人と変わらずとも、そのお心遣いは人間中山みきとしてのものではなく、「親神様のお心のみが現れる」という状態になりました。

しかるに、こう申しますと、“それでは、人間中山みきの心は使えなくなったのか？”という問いが出てくるかも知れません。つまり、「中山みき様の人格はどうなったのか？」という疑問です。

それで、この問いに答えるためには、先ず、心とはいかなるものかに言及する必要があるかと思いますが、私見を申せば、心とは魂の働きであります。分かりやすい例で言いますと、身体の動きを“動作”と言いますが、その動作に相当する魂の動き・働きが心なのです。

人間の身体の動作は、手を上げたり足を曲げたりという一つひとつの動き全てが動作であって、“手の動作はこれ”“足の動作はこれ”という、動作としての実体はありません。それと同じで、魂の動き・働きである心は、これが心だと指し示すことはできないものなのです。

つまり、“中山みき様の人間の心はなくなり、親神の心だけになった”というのは、例えば、人間の脳を移植して入れ替えたというようなものではないのです。あるもの・実体が他のものにとって代わるというのではなく、心の動き・働き方の様相・パターンが変わったということなのです。

このことをさらに詳細に申しますと、“口は月日が皆借りて”と言われるのですから、貸し主と借り主は別だということです。月日・親神様に口を貸しておられる主体、中山みき様の魂は変わらずに存在するのです。平たく申せば、「月日のやしろ」は社、月日が入れられる入れ物・容器であって、月日そのものではないのです。

これを喩えて申しますと、中山みき様所有のCDデッキから、人間・中山みき様作詞・作曲の歌が流れていたのが、月日・親神様作詞・作曲の歌のみが流れ出るようになったということでもあります。CDデッキ(身体)の所有者(主体)はあくまで中山みき様であり、音声も元のみき様のものなのです。しかし、そのデッキから音を出すCD(ソフト)の内容が親神様のものに入れ替わった。中山みき様というCDデッキから、月日・親神様の歌(言葉=月日の心の働き)しか聞こえてこないようになったということなのです。

(因みに、本席飯降伊蔵様の場合は、中山みき様のCDデッキからの音を、延長コードで繋いだ伊蔵様のデッキのスピーカーから出す時に限り、月日・親神様の歌が聞こえる。その他の時には、伊蔵様ご自身のCD(ソフト)からの歌が聞こえていると解釈できるでしょう。)

別の言い方をしますと、中山みき様の主体は、人間宿し込みの時に母親の役をなされた「いぎなみのみこと」の魂ですが、その魂は、お生まれになった時から「月日のやしろ」になられて以後も続いてずっと、人間の身体を持ったみき様の主体であり続けたのです。そして、陰暦明治20年1月26日以後は、その魂が中山みき様のお身体から離れられ、人間創造の元のちばを拠点として世界中を駆け巡り、たすけの実を現して下さっているのです。

さて、『稿本天理教教祖伝』の31頁には、

或る時は宮池に、或る時は井戸に、身を投げようと言われた事も幾度か。しかし、いよ〜となると、足はしゃくばって、一歩も前に進まず、

「短気を出すやない〜。」

と、親神の御聲、内に聞えて、どうしても果せなかった。とあり、また、『稿本天理教教祖伝逸話篇』の31頁の「22 おふでさき御執筆」には、

「ふでさきというものありましようがな。あんた、どないに見ている。あのふでさきも、一号から十七号まで直ぎに来たのやない。神様は、『書いたものは、豆腐屋の通り見てもいかに。』と、仰っしゃって、耳へ聞かして下さりましたのや。何んでやなあ、と思いましたが、神様は、『筆、筆、筆を執れ。』と、仰っしゃりました。…筆持つと手がひとり動きました。天から、神様がしましたのや。書くだけ書いたら手がしびれて、動かんようになりました。『心鎮めて、これを読んでみて、分からんこと尋ねよ。』と、仰っしゃった。自分で分からんことは、入れ筆しましたのや。それがふでさきである。」

とあります。

これらのお話から、教祖が親神様と対話なされたことがあった——親神様の声を聞いて行動を起こされることがあったことが分かるのですが、それは、言わば、言う方と聞く方の二つの主体があったということでもあります。親神様が教祖に語りかけられる。教祖が分からないことがあれば親神様に尋ねられる。それは、親神様≡教祖ではないということでもあります。

そして、これをさらに深読みしますと、教祖は「もしかすると短気を出される可能性があったのか？」また、「豆腐屋の通りを見たら心が濁ることがあったのか？」などと考えてしまうかも知れません。つまり、教祖のお心に迷いが生じる、教祖に人間心があったかのように思えるかも知れません。しかし、「口は人間、心月日」という事実は、教祖が神のやしろになられて以来変わらないはずであり、教祖には、人間関係で苦しんで短気を出したり、豆腐屋の通りを見て迷いが出るというような人間心が入り込む余地はないというのが、私たちの信仰の立場です。

とすると、これらのごことをどう解すればよいのかということですが…先にも記したように、中山みき様は、親神様そのものになられたわけではありません。みき様の人間としての魂も身体も元のままであります。暑いも寒いも、他の人間と同じように感じられるのであります。人間とは別の存在・神になったのではなく、同じように暑さ寒さを感じる中に人間のたどるべき“ひながたの道”をお示し下されたのであります。

つまり、暑さ寒さなど関係がない神様しか通れぬ道ではなく、生身の人間も通れる道=人間が通らねばならぬ道を、教祖が先頭に立って通って下さったのです。暑さ寒さを感じるのが人間。理と情の狭間で悩み、豆腐屋の通りを見ては神様のお言葉に雑念を交えて受け取るのが人間です。しかし、その暑さ寒さや人間心のさまざまな苦悩も、教祖は同じように味わって下さっていて、その上で親神様の思し召しを実現する道をお示し下された。ゆえに、我々人間も、教祖を“生き神様”として慕い、そのひながたをたどることができるのであります。

例えば、完全な左右対称の葉が揃っていて、虫食いの形跡や枯れた葉などが無い観葉植物が置いてあれば、誰もがそれを生きた植木だとは思いません。生きた植木の葉は全て不揃いで、枯れ葉や折れた小枝がぶら下がっています。本物・自然は、欠けるところがあるこそ本物なのです。つまり、人間としての欠けるところ、悩みや苦しみがその中に含まれているが故に、教祖のひながたは本物なのです。ひながたは、非人間的な完全無欠なものではなく、人間の不完全さをも包括しているが故に完全なひながたなのであります。